

〔シカの生息域拡大過程ならびに捕獲シカの肥育条件の解明〕

再造林地の植栽木に被害を及ぼす野生動物の分布

新井一司・奈良雅代・荒川純彦・中村健一

(緑化森林科)

【要約】ここ数年で急速に拡大した都内の再造林地では、ニホンジカ以外にニホンノウサギやニホンカモシカなど植栽木へ被害を及ぼす野生動物が広域に生息していた。今後、個体数の増加や分布域の拡大動向のモニタリングと被害の防止策が必要である。

【目的】

東京都は、2006年から毎年数十haの規模で、花粉対策事業として盛んに再造林を行っている。それまでの都内における再造林はほとんどなく、多摩地域の再造林面積は近年、急激に拡大している。一般に森林を伐採し植林した場合、ニホンノウサギ（以下、ノウサギ）などが急速に生息数を増やし、植栽木へ被害を及ぼすことが知られている。また、都内には、特別天然記念物のニホンカモシカ（以下、カモシカ）も生息しており、ニホンジカ（以下、シカ）と同様に、植栽木の採食、角研ぎによる剥皮などの被害を与える。このようなシカ以外の野生動物の生息状況を把握することは、今後のシカ被害対策を講じる上でも必要不可欠であるが、再造林地におけるこれらの情報は皆無である。そこで、センサーカメラを用い、2012年時点の再造林地へ被害を及ぼす野生動物の生息分布図を作成し、今後の対策に活用する。

【方法】

センサーカメラは、Reconyx製のHC500を用い、図1の6つの林地に各2～4台設置した。奥多摩町多摩川北岸では、シカ被害を避けるために、近年、再造林を自粛しているため、この地のみカメラを壮齢林内に設置し、他は再造林地に向けて撮影した。設置期間は、1地点を除いて2011年12月1日から2012年11月30日まで、継続して撮影した。カメラ1台ごとに月ごとの野生動物の延べ撮影頭数を数え、林地内で最も高い値をその林地の代表値として分布図にした。

【成果の概要】

1. ノウサギは、図2に示したように再造林地のすべてで確認された。ノウサギは、植栽木への被害も甚大であるとともに、既設の化学繊維製のシカ柵を噛み切って穴を空けることから、今後、多摩地域全域で最も注意が必要な野生動物である。
2. カモシカは、図3のように奥多摩町、青梅市、檜原村で生息していた。今後、シカと誤って捕獲しないことが重要であるとともに、シカ同様の林業被害が危惧される。
3. 再造林地における直接の林業被害はないが、林業従事者への人的被害が懸念されるツキノワグマは、図4のように奥多摩町、檜原村、八王子市で確認された。イノシシも直接の被害はほとんどないが、シカ柵のような構造物を破壊するなど間接被害があり、図5のように全域に広がっていた。なお、比較として、シカの分布を図6に示した。
4. まとめ：ノウサギやカモシカなど植栽木へ被害を及ぼす野生動物の広域生息が明らかとなった。いずれも今後の動向のモニタリングと被害対策が必要である。



図1 センサーカメラ設置位置図

撮影期間は、2011年12月1日から2012年11月30日まで。地点2のみ2012年4月1日から開始。カメラは、地点1が4台、地点3が2台、他は3台設置。地点1のみが壮齢林で、他はすべて再生林地で連続撮影した。

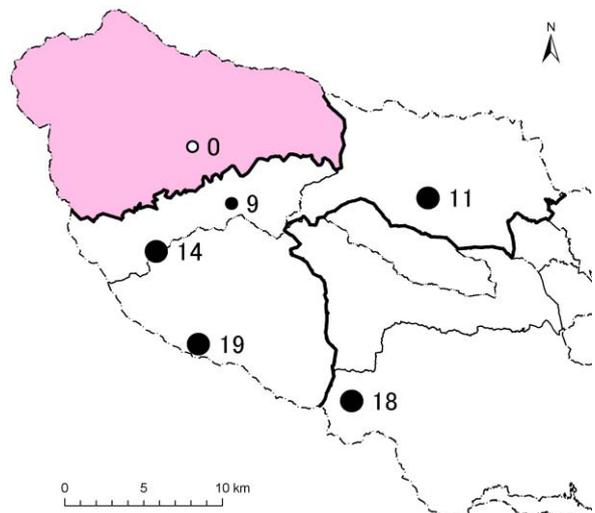


図2 ノウサギの月最大撮影頭数の分布
単位は、延べ撮影頭数/月

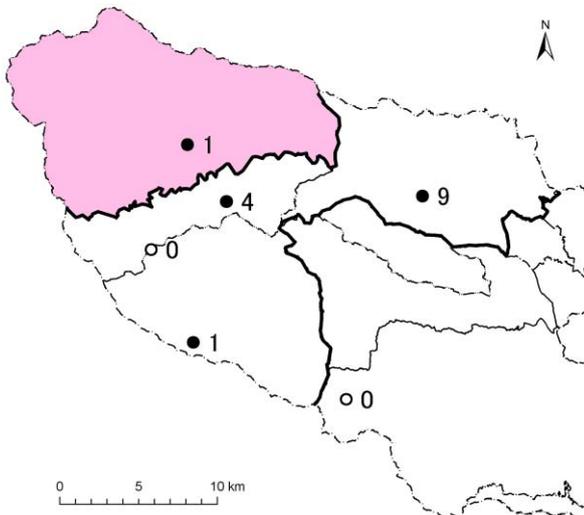


図3 カモシカの月最大撮影頭数の分布
単位は、延べ撮影頭数/月

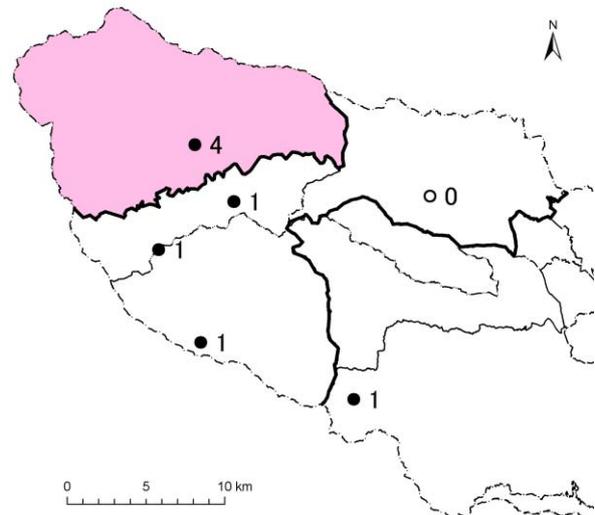


図4 ツキノワグマの月最大撮影頭数の分布
単位は、延べ撮影頭数/月

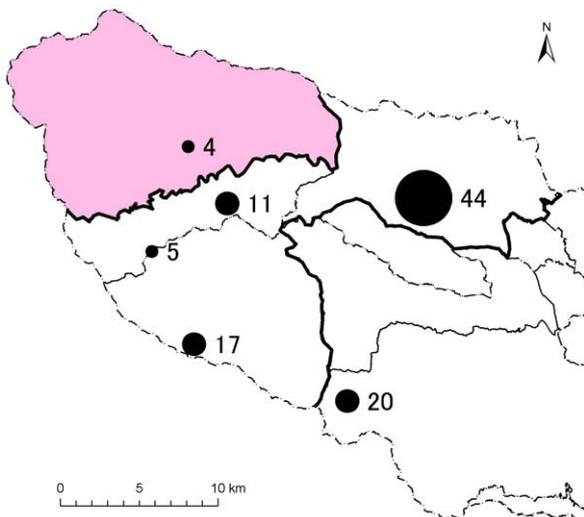


図5 イノシシの月最大撮影頭数の分布
単位は、延べ撮影頭数/月

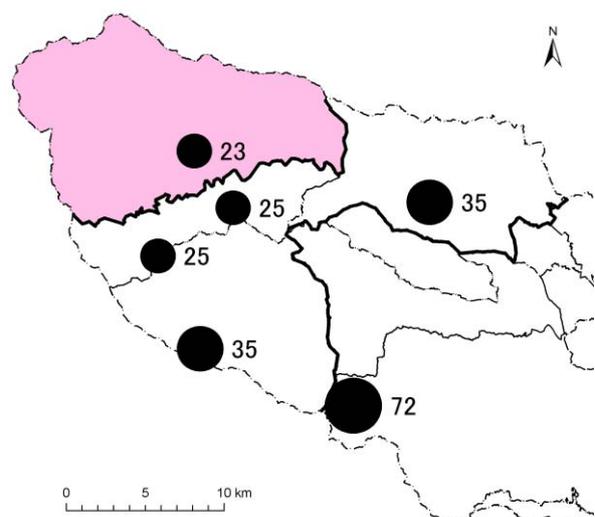


図6 シカの月最大撮影頭数の分布
単位は、延べ撮影頭数/月